JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORUM

No.12(Supplement)　March 2019

ラグビーフォーラム

平成31年3月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

日本ラグビー学会第 12 回大会

平成 31 年 3 月 23 日（土）

会場：関西大学堺キャンパス（A 棟 2 階）

〒564-8680 大阪府堺市堺区香ヶ丘町 1-11-1
南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約 1 分

共催：関西大学人間健康学部

目　　次

１．大会スケジュール　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

２．大会案内　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

３．発表案内　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

４．講演会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

５．一般発表（口頭）抄録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

1．大会スケジュール

一般発表（口頭）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　11:00～12:35

SA202 教室

総会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12:40～13:10

SA202 教室

講演会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14:00～16:00

SA202 教室

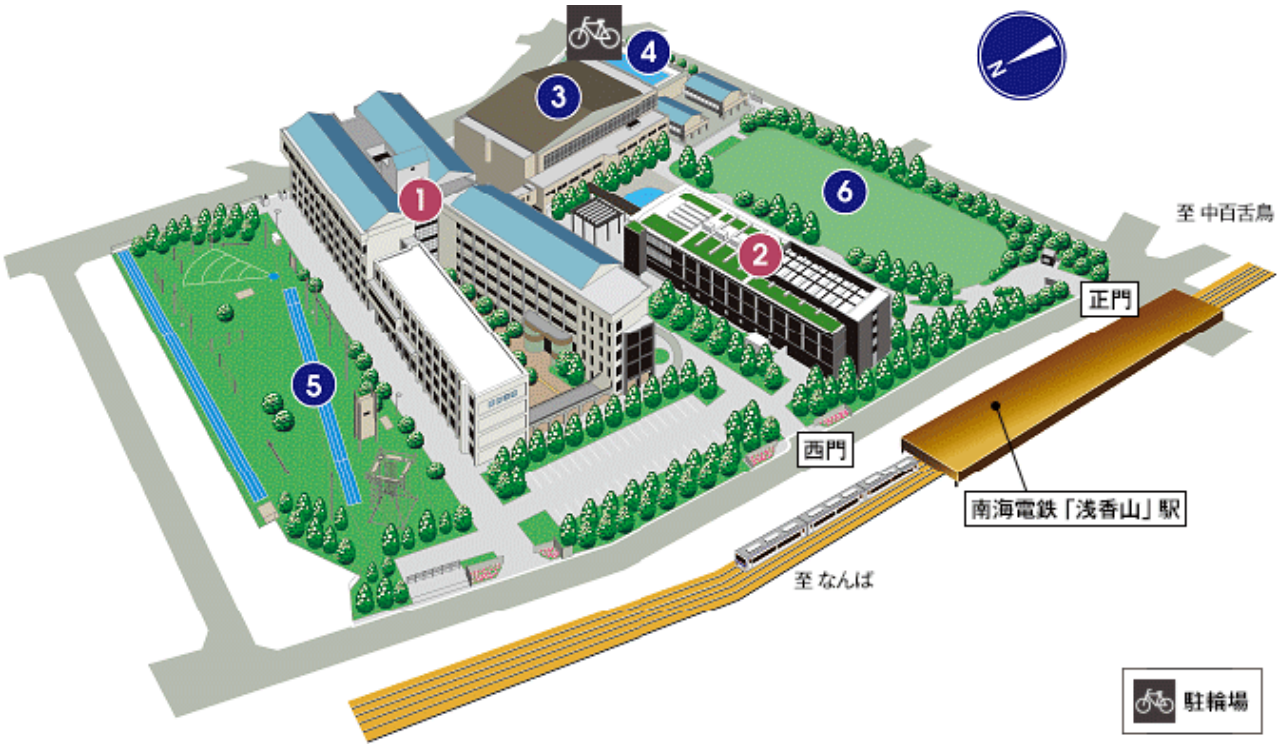
懇親会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16:10～

学内食堂

2.　大会案内

a.　会場

・関西大学堺キャンパス（南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約 1 分）
　A 棟 2 階（SA202～SA204 教室）



① Ａ棟（教室、堺キャンパス事務室、キャリアセンター）
② Ｂ棟（教室、堺キャンパス図書館、カフェテリア、購買店）
③ 体育館（アリーナ、格技・実習教室、トレーニングルーム）
④ プール
⑤ 体験学習エリア
⑥ Evergreen（広場）

b.　受　付

・総合受付場所：SA204 教室
　総合受付時間：10:30－14:00
　一般発表受付：10:30－11:00
・大会参加費等
　会　員　　1,000 円
　学　生　　無　料
　一　般　　無　料
　懇親会費　2,000 円
・必ず受付で入場手続きを行ってください。
・学会入会手続きも、総合受付で行っております。

c.　休憩と食事

・休憩所：SA203 教室
・昼食は、会場周辺の飲食店やコンビニエンスストアに限りがあるので、
　できるだけご持参ください。

d.　諸注意事項

・学内では係員の指示に従ってください。
・会場内での携帯電話等の使用を禁じます。
・喫煙は所定の喫煙所にてお願いします。
・貴重品はお預かりしません。手荷物の管理は各自でお願いします。
・大会事務局では盗難や事故について一切の責任を負うことはできません。
　各自でご注意ください。

e.　大会実行委員会

大会長　　石指宏通（奈良県立医科大学）
委員長　　灘英世（関西大学）
副委員長　外山幸正（とやまクリニック）
委員　　青木敦英（芦屋大学）、入江直樹（滋賀大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、川端泰三（関西大学）、北畑幸二（有限会社北畑産業）、鈴木道男（どんぐりラグビークラブ）、高木應光（ＮＰＯ神戸居留地研究会）、森仁志（関西大学）、山田光昭（大阪市立大学）

当日の連絡先：学会大会事務局　携帯　090-5094-4470（ 灘 ）

３．発表案内

a.　発表方法

・発表は口頭で行います。

b.　進行

・発表者は各セッションとも座長の司会によって進行します。座長の指示を遵守してください。

c.　発表時間

・発表時間「10 分」・討論「5 分」の合計「15 分」です。
ただし、フロアーから活発な質問等のある場合には、座長の裁量で討論時間の調整を行ってください。時間厳守でお願いします。

d.　資料配布

・資料を配布される方は、各自で準備し、大会当日に持参のうえ、発表受付担当者に提出してください。50 部を準備してください。

e.　機器使用

・ＰＣはこちらで用意します。発表データを「30 分」前までにＵＳＢ等でお持ちください。

f.　発表取消

・プログラムに掲載されている発表者が、不測の事情によって欠席せざるをえない事情の生じた場合には、大会事務局にできるだけ早くご連絡ください。連名発表の場合には、連名者が、大会本部の承認を得て発表を代行することができます。

g.　座長要領

・座長は、各発表会場受付で、受付を行ってください。座長は開始「20 分」前までに必ず受付を済ませてください。座長は、フロアーからの質疑等を促し、研究発表の円滑な運営が進行するようにご協力をお願いします。

4. 講演会

「ラグビーワールドカップを控えて〝ラグビー精神〟を見直す」

溝畑 寛治　（関西大学名誉教授）

【 要　旨 】

このままで良いのか、ラグビーのあるべき姿！

スポーツのプロ化は、勝つ事が強いられている為に、さまざまな問題を引き起こすこととなっている。ラグビーもしかりで、発祥から長年伝統的に伝えられてきた俗に言う〝ラグビー精神〟が崩壊しつつあるように思えてならないのは、私一人であろうか？

ラグビー人気を上げる為の一策として、ヒーローを作ったり、選手のモチベーションを上げる為にか、トライ王や得点王を表彰する制度が作られたりしているが、ラグビーは一人でトライすることができる競技ではない。トライをした選手を支えた選手達を高く評価するスポーツであるはず！そのために、それぞれのポジションによる役割分担がある。

一人でやる仕事もほとんどない。社会の中でどういう位置に立ち、どう働けばよいのかを考えるにあたり、身体で理解し覚えさせてくれる価値と魅力あるスポーツである。

派手なアピール行為は慎み、他者（相手）を尊重するラグビーの良さをしっかり認識させることが大切である。また、これからのラグビー本来の人気を維持していく為に何が必要か！〝初心忘るべからず〟は重い言葉である。

ならばどうすればよいのか！これからのコーチングのあり方から問いたい。

【プロフィール】

溝畑氏（日本ラグビー学会顧問）は日本ラグビーフットボール協会がビジョンとして示されているように「ラグビー競技を誰からも愛され、親しまれ、楽しめる、人気の高いスポーツにする」ことを目的に、「実践と理論の融合された」競技力の高い、人格的に優れた「人材の育成」と環境つくりに向けて再構築を目指し、体育学、教育学、社会学、哲学、心理学、医学等、あらゆる分野からのアプローチを視野にいれ、各専門的な学問領域でご活躍の方々から、一般ラグビーを愛する方々まで幅広く参画して頂くことにより、ラグビーというスポーツのアイデンティティの確立に研究という側面から寄与すると言う役割のもと、平成 19 年に日本ラグビー学会を設立され、これからの人間社会の中で、ラグビーというスポーツを通して、人間関係を確立することの出来る人材を育成する学問分野としての発展にご尽力されてこられた。

5. 一般発表(口頭)抄録

会場・タイムテーブル

会場：SA202 教室	
座 長	寺田泰人　　大西好宣
11:00	ラグビー選手における脳震盪の実態調査 高田正義（愛知学院大学）
11:15	大学ラグビーチームにおける重量級プロダクト・マネージャーシステムの適用可能性に関する一考察 伊藤鐘史（京都産業大学）
11:30	U8 タグラグビーの競技規則の改訂に関する一考察 ―ラグビースクールでの様相をもとに― 早坂一成（名古屋学院大学）
休憩（5 分間）	
11:50	ラグビーと戦争 ―大西鐵之祐の戦歴とその時代をたどって― 髙木應光（神戸居留地研究会）
12:05	サッカーワールドカップ　日本対ポーランドの試合から 西村克美（嵯峨野高校）
12:20	「ラグビー人学」試論 ―ラグビー普及の願いに応えて― 山碕敦司（ラグビー人類学研究談話会）

ラグビー選手における脳震盪の実態調査

高田正義（愛知学院大学）、杉原叡土（愛知学院大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、
早坂一成（名古屋学院大学）、寺田泰人（桜花学園大学）、小泉和也（名城大学）、小柳竜太（愛知学院大学）

キーワード：頭部外傷、脳震盪、ラグビー

【目的】

コリジョンスポーツにおいて、頭・頚部の外傷は時として重大な事故を引き起こす。脳震盪は、頭部に対する直接的あるいは間接的な外力で脳機能が損なわれる危険性を孕んでいるにもかかわらず、脳構造に明らかな損傷が見られないのが大きな特徴である。そこで、本研究はラグビー選手の脳震盪についての現状を把握して、予防策を検討することを目的とした。

【手続き】

対　象　者：東海学生ラグビーリーグに所属する選手 155 名を対象とした。

調 査 内 容：森崎[1]、大判[2] の研究を参考に質問紙を作成した。

処　　理：IBM SPSS Statistic Ver24 による単純・クロス集計を行った。

【結果と考察】

アンケートを集計した結果、脳震盪に関する認識に対して正答率の高いものに「意識がなくなる(98.1%)」「めまい、ふらつきがある(98.7%)」「ぼんやりする(97.4%)」「反応が遅い(94.8%)」「嘔吐する(89.7%)」などがあった。これに対し、正答率の低いものには「手足がしびれる(16.8%)」「怒りやすくなる(18.7%)」「興奮する(26.5%)」「脳出血が起こる(37.4%)」「目が見えにくくなる(37.4%)」などがあった。また、脳震盪の経験者は 65%に登っていた。

【参考文献】

１）森崎由理江 他、柔道指導者講習会の受講生を対象に実施した脳震盪に関するアンケート調査結果、武道学研究、46、77-85、2014.

２）大判茉奈 他、本邦における中学教員とスポーツ指導者の脳震盪に関する知識　−意識調査及び脳震盪に関する講習会の有用性の検討−、SSF スポーツ政策研究、2、296-305、2013

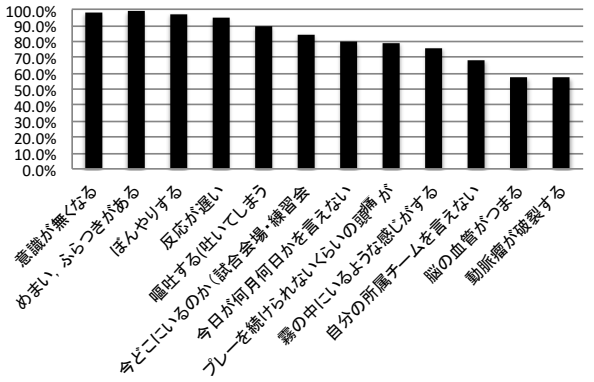


図1　脳震盪の認識（正答率高項目）

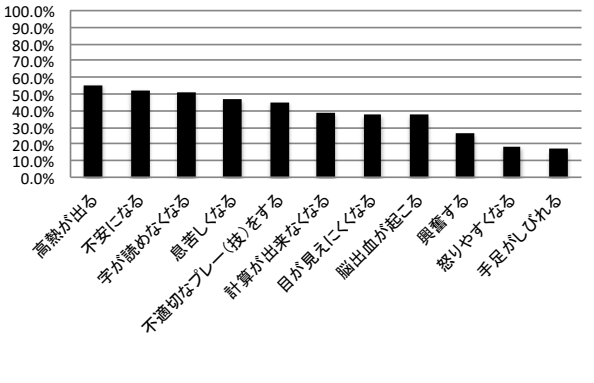


図2　脳震盪の認識（正答率低項目）

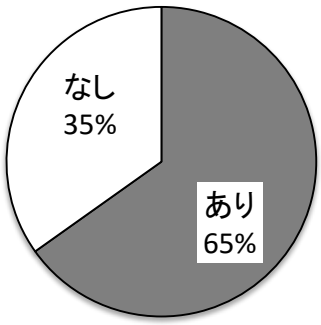


図3　脳震盪の経験

「大学ラグビーチームにおける重量級プロダクト・マネージャーシステムの適用可能性に関する一考察」

伊藤 鐘史（京都産業大学）

キーワード：大学ラグビー，組織構造，チームマネジメント，リーダーシップ

[目的]

本稿の目的は,自動車業界における成功企業において採用されている“重量級プロダクト・マネージャーシステム”を概観し，本システムの大学ラグビーチームへの適用可能性を検討することである.

“重量級プロダクト・マネージャーシステム”とは，自動車業界において，製品開発（内的統合）とマーケティング（外的統合）の両方に強い影響力を行使するプロダクト・マネージャー（重量級プロダクト・マネージャー）を中心に機能する組織構造のことである（藤本&クラーク，1993）.

重量級プロダクト・マネージャーシステムは企業活動分野のみならず，スポーツチームにおいても適用出来れば有効性が高いと考えられる．本稿では，数あるスポーツの中から筆者の競技経験があるラグビーを選択し，大学ラグビーチームに焦点を当てる.

[方法]

まず大学ラグビー新興強豪チームの定義を示し，既存データの分析から研究対象となる大学ラグビー新興強豪チームを抽出する． 次に抽出された 7 チームのデータを相互比較することにより， それらのチームに共通する要素を特定する.

一方， 自動車業界における成功企業に共通する要因は， 内的統合と外的統合の両方に責任を持つ重量級プロダクト・マネージャーの貢献にあると藤本とクラークが論じている.

自動車業界における成功企業と大学ラグビー新興強豪チームを相互比較し， 類似点を探求することにより重量級プロダクト・マネージャーシステムの適用可能性を検討する.

[結果及び考察]

自動車業界における成功企業と大学ラグビー新興強豪チームは，重量級プロダクト･マネージャー（重量級監督）がチームをマネジメントしているという類似点があるため， 大学ラグビー新興チームにおける重量級プロダクト・マネージャーシステムの適用可能性および有効性が充分期待できる.

大学ラグビー新興強豪チームの既存データを収集し， 相互比較した結果， それら 7 人の指導者のうち 6 人が大学の専任教員とラグビー部監督を兼任する重量級監督であることが判明した． これにより「重量級監督が大学ラグビー新興チームを大学ラグビー新興強豪チームに進化させる」という仮説が導かれた.

仮説を検証するため， 大学ラグビー新興強豪チームの中から 1 チームをケーススタディとして取り上げ， 既存データとインタビュー調査から分析を試みた． その結果， 重量級監督が大学ラグビー新興チームを大学ラグビー新興強豪チームに進化させると主張できる.

今後さらに， 他大学のケーススタディの作成・分析， 対照実験等を行い， 重量級プロダクト・マネージャーシステムの適用可能性および有効性向上の研究を進めていきたい.

U8 タグラグビーの競技規則の改訂に関する一考察
～ラグビースクールでの様相をもとに～

○　早坂一成（名古屋学院大学）　岡本昌也（愛知工業大学）寺田泰人（桜花学園大学）
高田正義（愛知学院大学）

キーワード：ラグビースクール　タグラグビー　コンタクトプレー

【目的】

2018 年 4 月 1 日、日本ラグビー協会は「U12 ミニラグビー競技規則の改訂の通達を行った。特に大きな改訂として、低学年（小学校 1、2 年生：U-8）の試合についてはタグラグビーを行うことを 1 年間の移行期間で実施することとした。この改訂についてラグビースクールの保護者がどのように理解しているか、またコンタクトを伴うラグビーの構造や教育的な価値をどのように捉え、理解しているかについて、ラグビースクールでの活動をもとに明らかにすることを目的とした。

【方法】

2018 年 12 月 16 日（日）、NG 大学 第1グランドで行われた愛知県内ラグビースクール 2 チームの交流会において、保護者 85 名に以下の質問紙調査を行った。

① U8 までのタグラグビー導入について
② U12 までのコンタクトプレーの必要性について
③ U12までの強豪国のコンタクトの有無について

【結果及び考察】

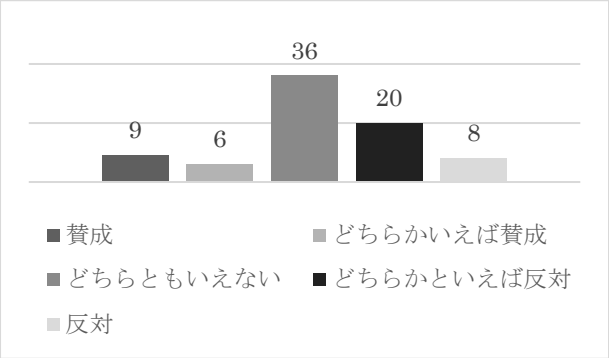


図.1 U８のタグラグビー導入の賛否

図.1 より U8 世代のタグラグビー移行に関して否定的な意見が多いことが示された。その理由として技能の向上及びルール理解の遅滞があり、U12 以上になった際の競技力向上への憂慮が推察される。

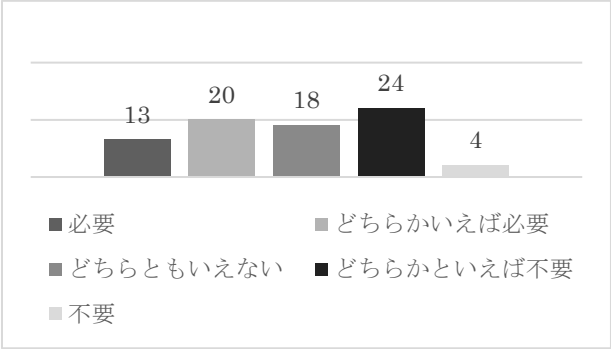


図.2 U8 の練習でのコンタクトプレーの必要性

図.2 に示したように練習でのコンタクトプレーを 42%の保護者が必要としている回答を得た。図.1 同様にタグラグビーだけを行うことにより、ジュニアグレードから上がった時のコンタクトプレーのスキルに関して興味、関心が高いことが伺える。

表.1 海外協会の小学生の競技規則のコンタクトの有無と正誤率

	U6	U7	U8	U9	U10
NZ	タグ	タグ	あり	あり	あり
	59.0%	45.4%	**56.5%**	**80.8%**	93.6%
AUS	タグ	タグ	あり	あり	あり
	55.9%	**48.7%**	**61.8%**	**80.8%**	94.9%
ENG	タグ	タグ	タグ	あり	あり
	58.5%	50.0%	**45.4%**	**79.%**	94.8%
JPN	あり	あり	あり	あり	あり

これまで日本は全てのジュニア世代においてコンタクト「あり」で試合を行ってきた。一方で強豪国は U7 から U9 がコンタクトプレーの境界線であり、保護者の理解の観点からは U8 から U9 がコンタクトプレーへの移行期と理解していることが推察される。今後ともジュニアグレードでのタグラグビー移行の周知とコンタクトプレー準備期としての理解が求められる。

【文献】 幼児・小学校低学年(1・2 年:U8)児童を対象とした試合へのタグラグビーの導入について(解説)　日本ラグビー協会 2018

ラグビーと戦争 ～大西鐵之祐の戦歴とその時代をたどって～

○髙木應光（神戸居留地研究会）　星野繁一（龍谷大学）　西村克美（嵯峨野高校）

キーワード：異様な 15 年戦争、過剰な精神主義、幸運、教育・スポーツによる戦後復興

１．目的

名監督・大西鐵之祐(大西)の戦歴とその背景にある戦争の時代(1930～'50)をたどり、戦争に翻弄されたラグビー及び人々の姿を知ると共に大西が、戦争の時代をどのように生きたのかを探ることである。

２．調査方法

『ラグビー 荒ぶる魂』『わがラグビー挑戦の半世紀』『闘争の倫理』『近衛第四歩兵連隊史』『援護局史』等から大西の生き様、戦歴を辿った。また、『太平洋戦争』『餓死した英霊たち』『復員・引揚げの研究』『終戦前後』等から戦争に翻弄された時代・人々の姿を捉える等、主として文献調査でテーマを探った。

３．考 察

１）満州事変から対英米戦争へ

大西の中学時代 5 年間に大恐慌、満州事変、満州建国、国連脱退など戦争への道が敷かれた。1934 年早大へ入学、全盛期へ向うラグビー部は、自由で自律的なクラブで世間の流れとは正反対だった。早大は 100 人もの部員を擁し、1936・37 年と連続全国制覇を成し遂げる。1936 年 2・26 事件は「軍部あって政府なし」の始まりだった。1937 年夏、盧溝橋事件から日中戦争へ。1939 年早大を卒業した大西は、東芝に入社。皇紀 2600(1940)年の奉祝に沸く世間を後目に召集され、近衛歩兵第４連隊へ。ラグビーで鍛えたスタミナに上官は、予備士官学校へ推薦。だが希望する教育教官の夢破れ、南部仏印へ従軍。マレー・シンガポール作戦、スマトラ攻略戦等で、数十回の戦闘に参加する。

国内では 1941 年 12 月 7 日伝統の早明戦、翌 8 日の早朝ラヂオが太平洋戦争の開始を告げる。シンガポール戦では、ラグビー校出身・司令官パーシバルの降伏で計 15 万人(英 10 万, 日 5 万)人の兵士が命拾いする。軍人の世界では評価は低いが、パーシバルはグッド・ルーザーだった。

国内では敵性語禁止、ラグビーは闘球と変えさせられ、ラグビー学徒壮行試合、戦死する前にと東大 vs.京大戦も秘密裏に実施される等、戦時色も一段と強まって行く。ミッドウェー敗退後、戦況は日増しに悪化、ついにレイテ沖海戦では「神風特攻隊」も出撃。だが大西はスマトラ島守備隊の副官として、戦時ながら終戦まで平穏無事な軍務を送った。

２）敗 戦

1945 年 8 月 15 日の敗戦は、日本史上・未曾有の出来事、民族存亡の危機。大西自身に「最大のショック」、価値観の崩壊をもたらし、その迫る先は、国家・軍隊・国家神道体制・戦争責任など国家の欺瞞性を探ることだった。BC 戦犯の可能性もある中、「ラガーマンなら信用する」と無罪放免される等、ラグビーに救われる。マラッカ捕虜収容所での飢餓体験を経て 1946 年 6 月復員する。

３）復興へ

終戦後も悲惨な状態が続く。特に食料不足は深刻だったが、敗戦から 1 ヶ月余の 9 月 23 日、関西倶楽部 vs. 三高の試合を行い 3,000 人の観衆が見守った(京都新聞 9.24)。これは戦後初のラグビーで、全てのスポーツでも初の試合だった。

やせ細った裸足の現役部員がラグビーをする姿に大西は、日本復興の意志を見る。復興は若者への教育以外にないと確信する。幸いにも新制大学で「体育」が必修となり、大西はラグビー種目の非常勤講師(後, 専任講師, 教授)に就く。

まとめ

司馬遼太郎が「なんと下らない戦争をしてきたのか」と唾棄し、「戦争とは我々国民にとって何だったのか」と大西が迫る。大西個人の戦歴を戦争の時代に重ねることで、当時の人々やラガーマンが、如何に理不尽で悲惨な状況に追いやられたかが理解できた。一方、大西個人は幸運にもラグビーに何度も救われた。先達ラガーマンがスポーツの復興に先鞭をつけ、他の種目にも希望を与える等ラガーマンのプライドを発見することができた。

サッカーワールドカップ　日本対ポーランドの試合から

○西村克美（嵯峨野高校）、星野繁一（龍谷大学）
高木應光（神戸居留地研究会）、淡路靖弘（京都産業大学）
キーワード：戦略、フェアプレー、ローとルール、競い合う精神

１．目的：昨年行われたサッカーワールドカップ・ロシア大会の予選、日本代表は第３戦のポーランド戦において、後半残り 10 分をボール回しに徹し、負けているにもかかわらず攻めることをしなかった。同時に行われていたコロンビアとセネガルの試合の状況から、このようなプレーが選択された。結果、反則数で日本代表が２位となり、決勝トーナメントに進出している。このプレーに対して世界中から賛否の声が寄せられた。スポーツとは勝利を追求するものだと言うことが常識であるが、このケースはどのように考えればよいのであろうか。筆者らは、アンケートを通じてこの件を考察した。

２．調査方法：調査票（別紙：発表時配布）を作成配布し高校生 25 名、高校指導者 18 名、大学生 67 名、社会人 55、合計 165 名から回答を得た。

３．結果：紙面の都合上、大きい数値を中心に結果を示すことにする。真夜中の試合に関わらず 65.0%もの人々が TV 観戦している。問題となる終了約 10 分位前からの味方どうしでのパス回しについては、「②決勝に進むための作戦の一つ」58.7%、「⑥他の意見（記入式）」13.9%、「⑤スポーツマンらしくない」9.5%、「①負けているので攻めるべきだ」9.3%、と続く。さらに順位付けでは１番が、「②決勝に進むため…」76.5%、「①」及び「⑤」が共に 7.1%。2 番では、「①負けているから攻める…」26.2%、「⑤」と「⑥」共に 22.6%だった。

４．考察：それぞれのカテゴリーで「②決勝に進むための作戦の一つ」とする意見が一番多く寄せられた。大学生の回答では、②を選んだ上で、⑥を選択し、意見を書き込んでいるものが多く見られた。「決勝トーナメント進出が目標なので、当然である」、「ルールに則っているので問題ない」という肯定派と「仕方ないが、試合としてはつまらない」、「戦略の１つだと思うが、見ていて面白くない試合なのは間違いない」等が多い。戦略に理解を示しつつも、試合としてどうか、と疑問を投げかける意見も見られた。高価なチケットを買って観戦した人なら、フラストレーションが溜まったに違いない。

５．終わりに：ラグビーの試合形式は定期戦が基本である。同レベルのチーム力を持つチームどうしが試合をするべきである、というのが基本的な考え方である。そこには目標とする試合に全力を注ぎ、フェアに競い合う姿がある。それがあるからこそ、ファンクションの意義があると考える。こう見てくるとスポーツの本質は競い合うことであり、競わない行為というのは全く違和感がある。ただ、プール戦、リーグ戦、トーナメント戦では、勝敗・順位等が明確でなければ成立しない。今回の反則数の多少も順位を決定する必要性、サッカーの抱える課題から決定したルールであろうが、日本代表のようなプレーが生ずるならば、再考すべきではないだろうか。ラグビーにおいては、ここまで消極的なプレー事象なはい。しかし、ノーサイド直前のホーンの合図後の横・後方へのキックや、リードしているチームの時間稼ぎ連続ラック等は、本質である「競い合う」精神からは明らかに逸脱しているのではないだろうか。

「ラグビー人学」試論～ラグビー普及の願いに応えて～

山碕　敦司(やまざき･あつし)　ラグビー人類学研究談話会(神奈川県川崎市)

キーワード ： スポーツ文化財、文化装置としてのラグビー、ラグビーの社会文化的機能性

1)目的

ラグビーは人類のスポーツ文化財(資産)として国境や民族･宗教を超越して大切に育てられてきた。改めてラグビーの文化としての重要な構造の分析考察を試み、ラグビーの社会文化的機能と使命を原理的に解明し文化人類学的な視野から評価を試みた。今後のラグビー普及に寄与する原論の一つとしたい。

2)方法

ラグビーを機能的文化財として、また教育や社会に介入できる文化装置(システム)としてとらえ、プレーの独特の厳しい環境構造を観察分析し、人格陶冶と社会成長に及ぼす各種因子と影響(社会文化的機能性)を発掘･抽出した。

3)結果

ラグビープレーヤーは厳しい《緊張困難環境》と絶え間ないストレスや CAOS(混乱)の下で練習やゲームを長時間体験しなければならず、その中で《積極果敢な態度と性格》、困難解決の手段を瞬時に選定決断できる《反応果断力》及び心身の《強靭性》(resilience)が強く求められる結果、これらの能力を合理的に獲得発達させる。また、社会集団や企業に強く期待される《利他的最適相互支援力》(Altruistic optimal mutual support ability)(One for All, All for one などで有名)と《強い倫理性》も同じく短期間に効率よく修得･涵養できる。加えて、プレーの過酷な緊張環境が続く中で双方のプレーヤーの間に《人間愛/同志愛》という感情が自然に生起し、これが「ノーサイド精神」の源泉となり、社会安定と人間交流の堅固な基盤へと連続し得ることが理解できる。

4)結論

ラグビーは安全な練習とゲーム運営を心掛ける限り、男女を問わず短期間で青少年のたくましい成長･発達とバランス良い《人格陶冶》を目的として教育や余暇活動にて健全最適な介入を行い得る文化装置と見ることができる。同時にラグビーは学校、地域、企業、国家等の社会に対して《利他的相互支援》という思考行動様式と態度を容易に修得浸透させ無用な争いや怨恨を排除し《人間愛》を与えて《社会自体の陶冶》のために介入できる稀有な文化財である。ラグビーはその歴史的な実績からも機能性の高い社会文化装置であることが理解でき、現代にあっても高い評価と尊敬を受けており、将来もまた発展進化を続ける人類の貴重な文化財である。

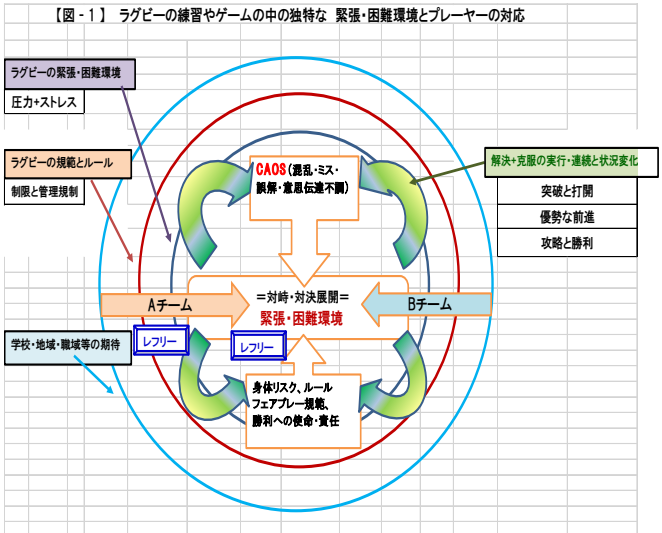
5) 考察

ワールドカップに見るように、洋の東西を問わず国境や宗教を超越してラグビーの人気は限りなく拡がり続けている。この現象は単に世界のラグビーを統括する《ワールドラグビー》の手腕や協賛企業の熱意だけによるものではない。世界が熱狂し世界で賞賛を受けるという真実の根底にはラグビーの優れた特性、隠れた有意義点が作用している。RWC とは世界から来客を迎えながら、今一度ラグビーの優位点を冷静明確に共有し、人類共通の文化的資産として認め合い、想いを深め合いながら感動を共有すべき絶好の機会である。また、これまで全国各地における過酷な自然災害の衝撃損害と悲しみを克服しつつ精神的復興と地域再建に立ち上がり、その中でラグビー普及の灯を絶やさず最前線で率先活躍し大きな社会貢献を果たしてきた関係者の方々には特別な敬意を表したい。

ラグビーは人類が産み出した貴重な資産であり天与･奇跡のスポーツ文化財の一つであると訴えたい。

今後もラグビーの持つ真実のちからによってすべての関係者･愛好者が主軸となり、正義感に燃え、社会をリードし気魂(spirits)とエネルギーでラグビーをますます普及させて、世界に勇気を与え続け繁栄に導いてくれることを期待し、信じて止まない。

【図 - 1】 ラグビーの練習やゲームの中の独特な 緊張･困難環境とプレーヤーの対応



ラグビーは【自律的修養･陶冶】という重要な社会使命を背負う高機能な文化装置である。